

語彙と文法の習得

—話しことばにおける動詞の使用—

鈴木 陽子

ペアを成す自動詞と他動詞

日本語には「あく—あける」や「しまる—しめる」のように形態的に似た形を持ち、同じ事態を表すことが可能な自動詞と他動詞のペアが存在する。これらの動詞は、世界のどの言語を話す子どもも早期に話しはじめる人や物の存在—非存在—再出現、物の交換—所有、人や物の移動や状態変化など日常的に経験する基本的な変化を叙述する動詞であり、子どもの初期の動詞学習において重要な動詞群に属する (Brown, 1973)。

しかし、日本語の話しことばでは動詞の必須要素となる名詞句や格助詞が頻繁に省略されることから、別々の活用形を持つ動詞のどちらが自動詞でどちらが他動詞なのか、その意味と形の違いを子どもが理解し、学習することは難しいように思われる。また、このようなペアを成す自動詞と他動詞は、同じ事態を別の視点から叙述するものであるため、自動詞と他動詞とが同じ文脈で交互に使われる場合も多い。例えば、(1) は子どもと養育者の実際のやりとりの例である。この例では、自動詞の「あく」と他動詞の「あける」とが、談話のなかで複雑に使い分けられている。

- (1) 母 親：これ あかない。
 母 親：あけたい？
 子ども：あけたい。
 母 親：あかないよ。
 子ども：あくよ。(RYO, 2;03)

さらに、ペアを成す自動詞と他動詞の使い分けは、日本語を外国語として習得する学習者にとっても難しいことが指摘されている。例えば、中石 (2003) は (2) のような例を挙げている。

- (2) a. (発表の前に) それでは、始まります。
 b. 良いアイデアが浮かべない。
 c. (ゼミの日程調整中) 月曜日は集めませんね。

(いずれも中国語母語話者・上級) (中石, 2003)

自他対応のある自他動詞対は、初級レベルの教科書で導入される項目であるが、それにも関わらず学習者にとっては使い分けが難しく、上級レベルの学習者であっても誤用が目立つ項目のひとつである。しかし、このような自動詞と他動詞の使い分けは日本語母語話者にとって難しい項目としては認識されていないだろう。

では、日本語を母語として習得する子どもたちは、どのように自動詞と他動詞を習得し、自動詞と他動詞の形式と意味の違いを理解していくことができるのだろうか。

話しことばにおける動詞の使用の特徴

本研究は、1歳6ヶ月から5歳の日本語母語児の自然発話データを分析することにより、ペアを成す自動詞と他動詞の使用の特徴を整理し、子どもの語彙知識と文法知識の習得について考察を行った。分析には「あく—あける」と「しまる—しめる」の他に、「はいる—いれる」、「でる—だす」、「のる—のせる」、「おちる—おとす」の6つの自他動詞対、合わせて12の動詞を対象とした。データには、養育者と子どもの縦断的自然発話データベースCHILDES (MacWhinney, 2000) を利用し、8組の日本語母語児とその養育者のデータを使用した。

対象とした自動詞と他動詞を含む発話から話しことばにおける動詞の使用についていくつかの特徴が明らかとなった。まず、格助詞や文の要素となる名詞句の省略である。全体の半分以上、約6割の発話は「あ、あいたね」や「あけて」といったように名詞句を全く含まない発話であった。そして、「が」や「を」などの格助詞の使用は2.5%から10%にとどまり、子どもと養育者の発話者の両方で使用は限られていた。このような言語使用の特徴を考慮すると、子どもに与えられる言語入力には動詞学習の手がかりとなる名詞句や格助詞が乏しく、習得の大きな助けとなるとは考えにくい。

より有力な手がかりと考えられるのは動詞形である。それぞれの動詞が使用される形に着目すると、自動詞と他動詞では頻繁に使用される動詞形の種類に違いがある。具体的には、自動詞では「あいて (い) る」や「あいた」、「あかない」といった形の使用が多く、他動詞の場合には「あけて」や「あけよう」のようなテ形や意志形の使用頻度が高い。それぞれの動詞には多くの形があるが、子どもは最初から動詞をさまざまな形で使用するのではなく、いくつかの限定的な形に特化して保守的に使用していた。これは、使用基盤モデル (Tomasello, 1992, 2003) が説明する子どもの言語発達プロセスとも符合し、1歳半ごろの子どもたちが動詞について項目依拠的構文 (item-based construction) を使用する段階にあることを示している。また、子どもが頻繁に用いる動詞形の種類は、同じデータの養育者が好んで使用するものと一致しており、初期の子どもの動詞の使用が養育者の使用と密接に関わることを示している。

好まれる動詞形の違いは、談話内に現れる分布の違いとしても捉えることができる。自動詞で頻繁に用いられるテイル形やタ形は、結果状態に焦点を当てる形であるため、動詞が表す事態が生じた後に発話される傾向が高い。一方、他動詞でよく使われるテ形や意思形は働きかけに焦点を当てる形であるため、動詞が表す事態が生じる前に発話される傾向が高くなる。このように自動詞と他動詞とでは、動詞が表す事態に対してその動詞が使用される談話上の分布にも違いがある。さらに検証が必要ではあるが、このような談話上の振る舞いが自動詞と他動詞の違いを理解するための重要な働きをしている可能性がある。

誤用に見られる特徴

子どもは言語発達の初期にはほとんど間違いを犯さないが、3歳以降に動詞を誤って使用しはじめる。(3) (4) がその例である。

(3) 自動詞を他動詞として使う誤用

- a. あ あいて！ (APR, 3;00)
- b. 玄関 を あけて ドア を しまって。 (APR, 3;06)

(4) 他動詞を自動詞として使う誤用

- a. これ どこに あけて (い) る の？ (APR, 3;09)
- b. どこ の あけて (い) る の？ (APR, 3;09)

誤用が起こる動詞形にも特徴がある。自動詞を他動詞として使用する誤りでは、23例中21例が(3)のようにテ形を用いていた。一方で、他動詞を自動詞として使用する誤りのうち、8例中4例は他動詞をテイル形で使用した例であった。自動詞で頻繁に使用される動詞形は結果状態を表すテイル形であり、他動詞で頻繁に使われるのは行為要求を表すテ形であったことを踏まえると、最も使用頻度が高く、定着した動詞形において誤用が生じていることが分かる。このことは、誤用が起こるメカニズムの背後に、言語入力における頻度の分布や、動詞形の定着度が関わることを示している。

最後に、これらの自動詞と他動詞の誤用について、子どもが何についての誤りは犯していないのかを考えたい。子どもは確かに自動詞と他動詞の選択を誤るが、全く異なる発話意図を表す動詞形を使う誤り、例えば、ドアを相手に開けてほしい場合に「あいている」と言い、ドアが開いたことに気づいた文脈で「ドアあけて」と言う誤りは犯さない。これは、子どもが自動詞か他動詞かという語彙の選択よりも、テイル形や意思形といった動詞形とそれが表す発話意図の理解を優先し、より定着した言語知識として持っていることを示唆する。

以上の観察から、子どもの動詞の習得が言語入力のなかで頻繁に使用される限定された動詞形から開始することを確認した。自動詞と他動詞に特徴的な動詞形は、単に形が異なるだけでなく、それぞれの形が表す発話意図や談話上に現れる分布にも違いがあり、これらの違いが子どもの初期の動詞の知識やその発達を理解する重要な要素となる。現在はこのような動詞の習得について英語と比較を行い、分析と考察を進めている。今後も語彙と文法知識との関係、それらの知識がどのように構築されるかを明らかにしていきたい。

参考文献

- Brown, R. (1973). *A first language: The early stages*. Cambridge, MA: Harvard University Press.
- MacWhinney, B. (2000). *The CHILDES project: Tools for analyzing talk. 3rd ed. Vol.2. The Database*. Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum Associates.
- 中石ゆうこ (2003) .「対のある自動詞・他動詞の習得研究の動向と今後の課題」『広島大学大学院教育学研究科紀要』第二部 第52号, 167-174.
- Rispoli, M. (1987). The acquisition of the transitive and intransitive action verb categories in Japanese. *First Language*, 7, 183-200.
- Tomasello, M. (1992). *First verbs: A case study of early grammatical development*. New York: Cambridge University Press.
- Tomasello, M. (2003). *Constructing a language*. Cambridge, MA: Harvard University Press.